



くれる人たちとの縁に恵まれてきたが、これは決して偶然の産物ではない。職人として、自分の技術を信じ、父の頭の中を具現化することに挑み続け、困難に立ち向かってきたからこそ得られてきたものなのだ。華真珠というパスポートで、今、

小松さんが世界を相手に商売ができること。それは職人としてまっとうに歩んできた証し。

「跡継ぎはどうされるんですか？」という質問に小松さんは少し苦笑いの表情で答えた。「もしやりたいという方がい

れば外国人でもどなたでも、育てたいという気持ちはありません。でも、ようやく苦勞して会社もここまで来たので、そろそろ純粋に自分自身、職人として挑戦してみたい。うん、しばらくは楽しませてください（笑）」



PROFILE

こまつ・かずひと

1971年山梨県生まれ。有限会社小松ダイヤモンド工業所・代表取締役。2009年『第3回ものづくり日本大賞』の最高賞、米国宝石カットコンテスト『Gemstone』カット部門で日本人初の第1位、新人アーティスト部門第2位を獲得。山梨県宝石研磨工業協同組合の理事を務めるなど、地元の宝石業界振興にも尽力している。

職人の技

シリーズ③④ 〈宝石研磨〉

小松一仁 さん

言ってみれば偶然が偶然を

呼んだ結果。柔らかな笑顔で

小松さんはさわやかに、そ

う自分のこれまでを振り返る。

確かに、偶然の出会いの連続

が彼のステージを世界へ、そ

して『ものづくり日本大賞

内閣総理大臣賞』受賞とい

う榮譽へ引き上げたことは事

実だろう。しかし、その偶然

を引き寄せたのは、変わらぬ

信念と工夫、そして明日への

希望だった。

事が見えました」

後を継ぐことを強く思っ

いたわけではなかったが、高校

生の時にふと、こんな発想が

頭をよぎったという。

「やらなきゃもつたいないな、

と思っただんです。それは父の頭

の中にあるもの、発想のすぐ

さを強く感じたから。頭の中

身を冷凍保存して、死んだ後

でも残したいぐらい（笑）。わ

たしが頑張れば、父の発想を

実現できる」

いくら工場を遊び場にす

るぐらいの毎日だったとはい

え、すぐに高度な技術を継承

できるわけもない。苦労、我

慢。だが父の「頭の中」の実

現は、小松さんを夢中にさせ

た。そして10年がかりで父が

傑作を生み出す。『華真珠（は

なしんじゆ）』。最高級レベルの

真珠に、繊細なカットを施す、

卓越のカット技術がなければ実

現しない逸品で、今では世界

中のハイジュエラーが扱う宝石だ

この華真珠を生み出し、広げ

ていくためには、技術同様高い

ハードルがあつた。それは、「常

識との戦い」。

「品質のいい真珠はそのまま

楽しむもの。そういう考えが

強い中で相当なご批判もあり

ました。それでも美しいもの

は美しい、という単純な思い

は強くて…。市場のことは気

にせずに取り組みました。そ

れこそ、それが小さな会社で

やっている喜びですから。自分

たちが美しいと思つたものを作

れるという」

その信念、いや、信念とい

うよりも、自分たちが正しい

と思つたことを負けずに続ける

という、愉快な意地が、人の

縁を作っていく。

「華真珠がまだ市場で受け

入れられなかったころのことで

す。たまたまアメリカでナン

バーワンといわれる宝石ディー

ラーが甲府に来られていまし

た。『ついでに見てもらっちゃお

うかな』という軽い気持ちで

会つたんですが、心底驚かれ

たようで（笑）。その方がアメ

リカでの市場を開いてくださっ

たんです」

そこから華真珠は世界へとそ

の美しさの輪を広げる。その

間にも支えてくれたり、さら

に広げてくれる人の縁があつた。

「イタリアの高級ジュエリー・

ブランドとの間を取り持つてく

れた香港の友人、神戸で大き

な会社を営むこの世界の先輩

不思議と困つた時、行き詰つた

時に偶然出会つた人に救われ

るんです」

「神戸の先輩」は白い真珠

を黒く色付けすることで新し

い真珠の魅力を創り出した人

小松さん同様、強い反発の中

で、自分が信じる「愉快」を

貫いて成功した人だった。小

松さんは、物心両面で支えて

●

山梨県甲府市。日本有数の
宝石研磨の町。小松さんが社
長を務める小松ダイヤモンド
工業所は、1967年、先代
の父「勇氏」によってこの地で歩
み始めた。

「家の1階と2階が居住ス
ペースで、3階が工場。学校
から帰ってくる自然に父の仕

お楽しみは、

これからです。



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto